

山と博物館

第5巻第8号 1960年8月25日 大町山岳博物館



ジュ
ガ
ー
ル
・
ヒ
マ
ー
ル

ベースキャンプからブルピチャチュムブ溪谷の対岸に連る無名峯
ぼく達は通称「カニバサミ」と呼んでいた。

山川勇一郎 画

Jugal Himal.
Y. Yamakawa.

南アルプスと その植物にひかれて

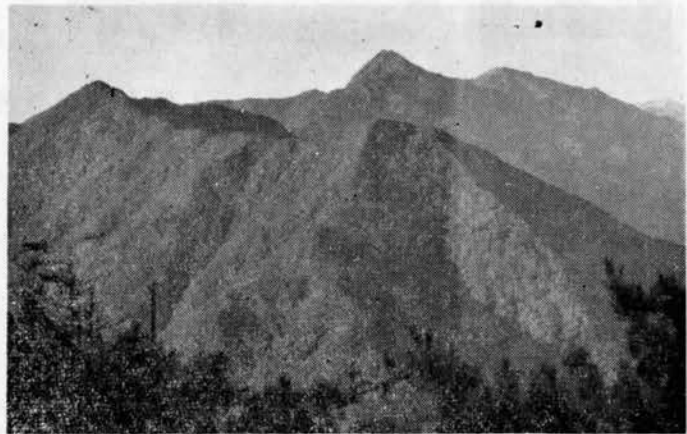
中 村 武 久

南アルプスに魅入られたのか最近南アルプスへの魅力が高まり、ひまをみては地図を広げ、休み近くなると早速計画するのが南アルプス行きである。長年北アルプスに馴れ、この植物には今尚少なからず愛着を感じているが、何故こんなにも心ひかれるのかと思うと不思議でならない。こういえば何か浮気者と誤解されるかも知れぬが、南アルプスには北アルプスとは違った魅力が存在する。

本誌第5巻1号で南アルプス南部、遠山川水系の植物調査から、主に山腹部の植生について紹介したが、今回北部三峯川水系、戸台川流域から仙丈岳、駒ヶ岳方面の植物調査に出掛けたので、今までの南アルプスについての知識から極くその一面ではあろうが愚稿を披瀝する次第である。

或るガイドブックに「南アルプスは、北アルプスのような豊富な雪渓もなく、峻険な岩場の峻なす豪快な明朗さもなく、瞬間的に爆発する登高欲の満足も得られないただあるものは、どちらかといえば暗い地味な重量感だ……」と書かれているが確かにその通りで、北アルプスのように短時間にして低山帯、亜高山帯、高山帯へとその変化をみることは難しい。このように奥深い森林と溪谷、比較的なだらかな曲線で書き出される山容、今まで未開発とされていた南アルプスも近年、年と共に開発され、特に北部駒ヶ岳、仙丈岳、北岳、農鳥岳方面への交通の便は可成りよくなっている。従って登山者も年々その数を増しているようであるが、矢張り開発されたとはいえまだまだ原始的な香り高い地域は各所に存在している。また北アルプスのこの頃は年を逐って都会からの距離が近くなり、山まで来て味わえずとも町の中でいくらかでも味わえる騒音が入り、先年夏の夕暮れ、白馬山頂に浴衣姿をみかけた時はしばし奇異な思いに目をそらした程である。その点南アルプスは山深いだけあって必要以上の下界の風習をそこまで近づけてはいない。こんなところにも南アルプスの魅力の一つが在るのだろう。

さてこの南アルプスを四度や五度の経験でとやかくいうのは甚だ心苦しく、ましてやその植物については極めて限られた知識しか得ていないが、それでも今までにいくつかのおもしろい事実を上げられたという事は、矢張りその植相が複雑であることを物語るものであろうし、また未知なる問題も数多く蔵されていることに他な



駒ヶ岳中腹より後峰北岳をのぞむ

らない。長い間登り続けた北アルプスの植相が貧弱だということではない。むしろ山頂部に到っては、北アルプスの方がはるかに植相も豊富であり、その他の点についても優位なことはいうをまたないが、南アルプスの場合、それとは別の意味でその植物に興味をもてるのである。垂直分布の問題、また一つ一つの種についての地理分布の問題、これらは位置が違い地質の異なる北アルプスと南アルプスとは当然違う筈であり、それぞれの特性がもちろん存在するのである。例えば、極めて僅かではあるが南アより緯度の高い地に在る北アの場合は、寒地に位置する高山の感があるが、それに対し南アの場合、暖地の高山と思われる点が多からず伺える。もちろんこれは山麓の植相から考へられることで、同じ南ア地帯でも南部遠山川流域と北部三峯川流域では可成りの違いがあるが、ともかくこうした山麓の植生は僅かずつではあるが中腹へ、また高所の植生へ影響しており、これがそれぞれの山の植生を形造る原因の一つと考へてよからう。

去る7月の南アルプス行きは特に北部の山域を対称とし、三峯川上流、戸台水系と仙丈岳、甲斐駒ヶ岳周辺の植物調査を行ったのであるが、植物の問題に触れる前に一つの失敗談を紹介しておこう。これも南アルプスの一面と思われるから。

というのは、今まであらゆる場合にそうであったのだが、山行きの場合まず最もそのよりどころとしていたのが陸地測量部、いや地理調査所の5万分の1地図、もちろんガイドブックなどにも目を通すが、現場に行ってみると、それと可成り違うことが南アルプスではしばしば遭遇するというのである。その第1の失敗は山麓でのこ

と、最近戸台までバスが入ることは知っていたが、新宿を朝出発した関係その日の中に戸台まで行き着く計画はせず、伊那北から途中の戸台口まで市野瀬行きでバスで行き、翌朝のバスで戸台へ行く、そんなわけで午後伊那北でゆっくり食糧装備などの点検をし出発した。戸台口でバスをおり、テント場を探していると折からの夕立ち橋のたもとにあるバスの待合所で休んでいると、たまたま一日の作業を了え家路を急ぐ山人が通りかかり聞くともなく尋ねたところ、戸台行きのバスはここを通っていないことを知り、約2km川上の黒川部落まで、雨の降る夕暮れの路を歩く羽目になってしまった。これは昨年の台風で川沿いの道路が決壊したため山道を改修し、バスはその山道を通っているのである。これは小さな失敗で行動にそれ程重大な影響を及ぼす程のものではなかったが、矢張り現地についたら先ず山の近況を地元の人に聞くことの如何に肝要であるかを思い知らされたのである。バス道路ぐらならまだどうという程のことはないが、山道について斯かる失敗をしたら夕暮れの雨降る中を2Km余分に歩いたぐらいでは済まされまい。南アルプスの山道については慎重に検討すべき箇所が少なくない。例えばこの途すじで、赤河原から八丁坂を登り切ってややなだらかな登りになる辺り、山腹を右にまいて藪沢に出、藪沢沿いに仙丈に登るルートはおそらく地図上に明記し残すべき山道ではないし、また最近多くの人は北沢峠から駒ヶ岳へ登るのに仙水峠を経て駒津峯へ出るが、峠から直接登るルートはひどい倒木の波で可成り時間を浪費する。そしてまた奇岩屹立する六方石から駒を左にまいて6合目に出るコースは地図に明記されている(極く最近のものは消されている)が、その途らしい影はどこにも見当たらない。斯様に開けているという北部地域がこんな具合であるのだから南部に到ってはおして知る可しである。

さてこうした地域で普通の山登りならともかく余計な道具を持っての山歩きはまた余分な時間と労力を要するのである。日増に重くなってくる荷物、然しそれにも増して心をいやしてくれるのは矢張り植物だ。先きにも述べたように南アには北アのそれの如く短時間にして急激に変化する植生はみられないが、その僅かずつの変化の中にはまたそれだけの興味あるものが現れてくるのである。然し全てが北アルプスと違い南アの植物が南ア特有なものだけとは限らない、大部分の種類は北アと共通であり、またその景観も北アと似ていることは同じ本州中部の近接山岳地として当然のことである。ただ特別な種類についてみると北アとは可成り違った問題が考えられるのである。もちろんその決定的な違いは先きの緯度の差によることもその一つではあるが、この地域の大部分が古生層に含まれること、細かに区分すれば更にいくつ

かのブロックになるが、とも角地層が古いということがこの地域の植相に重大な関係をもっていることは疑えない。ちなみに高所のものだけについて眺めてみよう。まず専門分野であるシダ植物からみると、特に高所のシダは比較的古い地層を好んでいる。その点からも南アの方が種類も豊富で、北アでみられるシダは特別な2・3の種を除いては殆んど南アに産し、一方ヤツガタケシノブ、タカネシダ、クモイカグマ、トガクシデンダ(北ア産の報告もあるがおそらく何かの間違いであろう)、イナデンダ、キタダケデンダなど秩父山塊や八ヶ岳などに僅かではあるが分布しておりながら北アではみられない。種子植物でもまた同じ問題が考えられる。かといって北アルプスに固有のものが無いわけではない。然しそれは極めて新しく分化した種類であり、また分布の上から特に問題となる程のものではないのである。ところが南アでは、北岳産のキタダケソウ、比較的広い地域に分布しているが稀産種のタカネマンテマ、などは分布上可成りおもしろい問題が考へられるし、また古くこの山中で分化したと考へられるキタダケキンボウゲ、キタダケトリカブト、キタダケヨモギ、ハクホウナズナなど固有の種類が比較的多い、またこれに加えて、北アルプスで発見命名されたシロウマナズナ、シロウマオオギ、ヒナコゴメグサ、コツガザクラ、ウメハタザオなど、ともすると北ア固有のものと思われがちであるが南アにも僅かではあるが見出されている。

こうしてみると南アの方がその植相においては優位ではないだろうか。ただ北アのように定って山頂部近くに発達する高山草原、いわゆる御花畑は南アには少なく僅か北岳、仙丈岳にみられるのみで、他の山岳では例へあっても極めて小さなものである。その点みごとな景観をもつ北アに比べ見得可きものはない、然しまたそれだけに山深い南ア山中の植物は、その足跡を深くする毎に何か新しい事実が収穫出来るのである。これは生態的なことに触れることになるが、つまるところその山中に分布する各種の植物は、北アの如く御花畑としてまとまった群落とならず各所に分散しているのである。これはハイマツとの関係を調べてみないと解らないが、武田久吉博士のいわれる、日本の高山の極相がハイマツで代表されるなら、とりもなおさず南アルプスの植生は北アのそれよりはるかに進んでいることもうなづけるのである。従って珍品と呼ぶ可きいくつかの植物が人知れず山かげに育っていることだろう。

何れにしても地味な、そして原始的な香り高いこの南アルプス、そしてその植物に今日もまた心引かれてゆく。

ヒマラヤ墮落論

本 多 勝 一

「ヒマラヤを日本アルプスと同じように考える」と言っても、もうそれほど世間でとんでもないことだとは思われない時代になったようだ。つい数年前、われわれがカラコラムやイランの遠征を計画していたころには、こんなことはまるっきり通用しなかったけれども、われわれとしては基本的にはそのつもりで実現したのである。もっとも、今西錦司だの梅棹忠夫だの岩村忍だのといった先輩は、さすがに以前からこれが持論だったから、その影響が第一にあったことは疑いない。でも、私がここにこんなことを書くのは、やはり、まだ世間では、いや山男たちの間でさえ、ヒマラヤというものを特別視するあまりに、なにかドエライことみたいに考える習慣があると思われるからである。そして、少しでもその考えを打ちやぶって、ヒマラヤなんか日本アルプスの延長にすぎないことを知り、ヒマラヤを夢想するあまりに本当に自分の力をそそぐべき進路をガゼツさせたりせず、ヒマラヤなどは片手間に趣味としてドンドン遠征するようになってほしいからである。

今西さんはこんなことを言っている。山岳部の新人が日本アルプスではじめて訓練をうけると全く同じ意味で新人をはじめからヒマラヤへつれていったっていいじゃないか。その方が、かえってヒマラヤというものを偏見なしに身につけた岳人が生まれるかもしれない……。

要するにこれでいいのである。ベテランがゆこうと、新人がゆこうと、日本アルプスでは問題にならないと同じように、ヒマラヤでも問題ではない。もちろん遠征というものに不可分の「出国」のための条件はある。資金外貨、言語……。しかしそれらは、しょせんテクニックの問題にすぎない。テクニックというものは、それぞれなんとか手段をつくして目的を達するためのものなのだ。それによってヒマラヤ自体の姿が変えられるべきものではない。

「大切な外貨を使って、そんなイイカゲンな遠征をするなんて……」という人もある。大変純心だし、憂国の気持ちはわかるが、それならば何百万円を使って「視察」という外国観光旅行をする金権代議士をださぬために選挙のとき身近かな人たちを説得した方がいい。少しばかりの外貨で若人がヒマラヤへ出て、外から日本をみる機会をもつことの方が、はるかに有益である。ヒマラヤ遠征費の日本経済に対する影響などはゼロに等しい。むしろ優秀な装備の見本をみせて歩けば貿易上のプラスに

なるくらいだ。

また、ある大学では現役のヒマラヤ遠征計画に教授クラスの1部OBがシブイ顔をしている。「まじめに日本の山をやっていたら、そのうちにゆけるようになる」というのだ。これなどは、第1に行動を自ら起す力のないOBの証拠。第2に若い者は実力がないと決めこんで、ヒマラヤをなにか教授か博士号みたいな資格問題として考えている古い頭の証拠。第3に、若いくせしてもう外国へ出やがるというシットとヒガミを持つてる証拠だ。要するに国際的感覚がニブイのである。イギリスなどは学生や社会人のグループが、実にかんたんに出かける。これはひとつにはヒマラヤが彼らの旧植民地周辺にあることも原因だが、やはり外国というものへの考え方による点大きい。

このころ週刊新潮やら週刊公論やらが、日本の遠征隊の悪口をかいているが、誤解によるものをのぞいて、これは別の問題だと思ふ。おそらく根本的には、日本的感覚があまりにも非国際的なために、たしかに悪評も起りうるかもしれない。決して貧乏旅行であるための結果ではない。人夫の足のケガの手当てを「踏鉄直し」といいうだけでなくそれを公式記録に書くセンス、ひそかに貴重なるものを失敬してきて誇らしげに公言するセンス、



(部族地区「スワート」の奥)
池のほとりて踊るポーターたち

酔っばらえばどんなヤバンな言動をしても大目にもみるセンス——こういった現象は、かつての旧制高校にその興

型のひとつをみるが、パンカラなどというものは、その仲間以外のところではカスミたいなもので、ただただケイベツされ、悪評される以外にとりえはない。ヒマラヤにどんどん遠征隊がでること心配な点といえは、私はこの件だけだと思ふ。われわれはどんな人に対しても、堂々と、紳士的に、しかも親しみをもって対してゆけばよいのである。手続き上のことでネバったりテクニク

をろうするのは、少しも恥すべきことではない。政治力の問題だ。

ヒマラヤで遭難したりしてはまずいが、しかしこれは日本アルプスも同じことで、なんら本質的なミゾは存在しない。日本の山好きな人たちが、つまらぬ世評を気にすることなく、どしどし海外遠征をされるよう私は希望している。(京大士山岳会員・京大探検部OB)

山岳名を冠した植物(5)

寺 島 虎 男

- | | | | |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------|---------------|---------------------------------------------------------|
| 5. ツクバトリカブト | <i>Aconitum tsukubense</i> Nahei | おだまき、トリカブト | |
| 7. 庚申山(1901m)下野 | | | |
| 1. コウシンソウ | <i>Pinguicula ramosa</i> Miyoshi | たぬきも、ムシトリスミレ | ムシトリスミレに似て小形途中で花茎が分岐淡紫色花 |
| 8. 清澄山(383m)安房 | | | |
| 1. キヨズミメダケ | <i>Nipponocalamus Kiyosumisimono</i> (koidzumi) Honda | たけ、メダケ | |
| 2. キヨズミザサ | <i>Sasa Kiyozumiana</i> Nakai | たけ、ササ | |
| 3. キヨズミメシダ | <i>Dryoathyrium coreanum</i> Tagawa var. <i>Kiyozumianum</i> Kurata | おしだ、イヌワラビ | コウライイヌワラビの変種葉柄短く長さ9~16cmで中軸と共に片鱗がより多くつく稀産 |
| 4. キヨズミシダ | <i>Polystichum tsussimense</i> (Hook) J. Smith | おしだ、イノデ | 一名ヒメカナワラビ、鱗片は黒褐色で線形、子のう群は小羽片に2列に並び中間生 |
| 5. キヨズミツバツツジ | <i>Rhododendron Kiyozumense</i> Makino | つつじ、ツツジ | 成時葉の下面無毛or中肋に淡い白色の開出毛あり、花冠紫色、頂芽に1-2個、花柱垂毛 |
| 6. キヨズミイボタ | <i>Ligustrum Tschonokii</i> var. <i>Kiyozumianum</i> Ohwi | もくせい、イボタノキ | 狭長な円錐花序、葉は広卵形、少し有毛花序有毛 |
| 7. キヨズミウツボ | <i>Pnacellantus Tubiflorus</i> Siebold et. Zuccarini | はまうつぼ、キヨズミウツボ | 花10ヶ内外、白~淡黄色、白色後に黄変 |
| 8. キヨズミコケシノブ | <i>Mecodium oligosorum</i> H. Ito | こけしのぶ、コケシノブ | 根茎は毛管状、中肋及葉身の下面共に赤褐色、2回羽状複生、子のう群は中肋に近く羽片の各側に1例につき包膜は円腎形 |
| 9. キヨズミギボウシ | <i>Hosta Kiyozumensis</i> F. Maekawa | つるぼらん、ギボウシ | 花茎は葉よりも著しく高く28~36cm、葉の両側に5~6脈、花は偏側に4~5、白色 |
| 10. キヨズミヤブマオ | <i>Boehmeria kiyozumensis</i> Satake | いらくさ、カラムシ | ラセイタソウとヤブマオ系のものとの移行を示すもの |
| 11. キヨズミヒメワラビ | <i>Ctenitis Maximowicziana</i> | おしだ、カツモウイノデ | 一名シラガンダ、鱗片は開出、または外反し錆褐色の暗褐色、包膜は円形 |
| 9. 且沢山(1567m)相模 | | | |
| 1. タンザワザサ | <i>Sasa tanzawana</i> Makino | たけ、ササ | |
| 2. タンザワヒゴタイ | <i>Saussurea Triptera</i> Maximowicz var. <i>Hisauchi</i> et. Ohwi (kitamura) | きく、トウヒレン | 茎の高さ40~60cm殆んど翼を欠く、頭花は疎に繖房or総状、花冠長さ11~12mm |

昆虫標本の作り方

興 水 太 伸

多くの人達が幼少の頃鱗蛉や蟬と戯れた経験のあるように、今の小中学生も、全く昆虫と無関係に育っている者はあるまい。夏休みの宿題、理科の学習等、昆虫との関係学習や標本を見るが、多くの生徒は勝手な方法や、手順によっているものが多く、また切角採集はするが、昆虫標本として整理し、それを使って次の研究や学習に役立てている姿は見受けられず残念なことである。

そこで博物館の要望もあったので、これ等の人達の何らかの参考にと、二三の著書や私の経験とをまとめ昆虫標本作成について一般的な解説を記してみたい。

1) 蝶や蛾の標本

採集して来たものをすぐに標本とする場合は、普通行われているように展翅板を使って翅、脚、触角を整え、プアラフィン紙テープでおさえ乾燥させればよいが、展翅板は生品展翅用の両側の高い展翅板を使い、一ヶ月位の時間をかけて乾燥するがよい。

硬化したものを展翅しようとする場合は、湿度の高い器（シャーレ）に三角紙ごと2~3時間入れた後、胴に少量の水を注射し再び三角紙ごと器の中に入れ3~4時間後に取出し軟化したものを展翅する。この場合の展翅板は平面の軟化品展翅用のものを使うがよい。

軟化する時砂を使ってもよいが、この場合全体を砂に埋めずに胴の部分のみ砂に埋めるのが望ましい。針はよい標本を作るのに大切な要素であるので、市販の安価なものを用いず長さ4cm位の昆虫専用針（有頭、無頭、鉄洋銀、日本、外国製などの種類がある）を用い、大きさは昆虫相応なものを用いるがよく、その一例として次の見当で使う。

0~2号針……シジミチョウ位の大きさ

2~3号針……タテハチョウ位の大きさ

4~5号針……アゲハチョウ位の大きさ

尚展翅時に使う止め針は、マチ針が便利である。

2) 甲虫、カメムシの標本

小さな、柔かな、針の直接刺さらぬものは、専用の微針かダブルピンを用いるか台紙に貼付したものを昆虫針で止めるかする。台紙はケント紙アイボリー紙セルロイドなどで出来た専用の、方形、三角形のものもあるが名刺の裏、定期入れのセルロイド等使って自作したもので充分役立つ、糊はいろいろあるが、セメダインは良くない、私の経験からは志賀昆虫普及社（東京）のネオスデコと云う糊が結果的によいと思う。

直接針の刺せる大きなものは、甲虫の場合右翅上部にカメムシの場合は胸部中央に針を刺し展翅板上で整形し

乾燥させる。展翅板は必ずしも専用のものでなくとも、菓子箱、ダンボール等利用してもよい。針は全長3分の1位は背面に残るようにする、高さを一定にすることが、標本を美しく見せる一つのコツであるが、このための専用平均台と云う用具もある。

硬化したものを標本にする場合は、熱湯中に5分間位入れ軟化するが、毛の多いものなどは変色するおそれがあるので、これは蝶の軟化と同じようにする。

3) トンボ、バツタ類の標本

これ等のうち特に雌は腐り易く、変色し易いので腹部内臓を取除く必要がある。これは腹部下面を縦に切開し（末端2~3節を残す）ピンセットで内臓を取除くのであるが、この後へ、トンボの場合はイネ科の花茎をさし（イトトンボ類は釣糸がよい）バツタの場合は脱脂綿を入れる。何れも早急に乾燥させることが、変色をさせないコツである。

トンボの場合展翅は展翅板を用いたり、三角紙に四枚の翅を閉じて入れ、乾燥したものを横刺しにしたり、ガラスふたの小箱に入れりして標本とする方法がある。

4) 蛹、幼虫の標本

昆虫の蛹は腹節の境目にそって二つに切り離し、中味を取り出した後、ホルマリンで掃除をし再び糊づけし、マユのものはその中に納めて標本とする。

幼虫の場合は、鼻紙の中にはさみ、軽くもむと肛門から内蔵が出て来るのでこれをピンセットで取除き、ここにガラス管をさし、スプレーで空気を吹き込みふくらませたものをランプのホヤ状のものに入れ、下からアルコールランプで熱しつつ乾燥させる。ガラス管の代りに麦わらを入れて処理し、終わったら適當の長さに切って、これに針を刺し標本とするのもよい。

5) その他の標本

イトトンボ類は色彩の変化がはげしいので保存をするのに困難であるが、生きたものを直接70%位のアルコール中に入れ、液清標本とすると割合に原色が保存されるので、この方法をとると、手軽に出来る。

卵や卵塊の標本も柔かいものは液清とし、固いものは熱湯で殺した後、管瓶か台紙に貼付し標本とする。

翅脈の標本は、鱗粉のあるものは筆でこれを取り、ガラス板にはさみ、合せめにめばりをして保存する。

ガガンボの類、その他こわれ易い胴や脚をもった昆虫は、セロファン紙などの透明三角紙に包みそのまま台紙等に貼って保存する。

寄生蜂の微小なもの、ノミ、シラミ、蚊やハエ等の部

分標本などは、ガムクロラル液のようなもので、プレパラート標本として保存する。

鱗翅類に従来行われた鱗粉転写標本もよいが、私は直接翅を画用紙の適当な大きさのものに透明ゼニールテープを使って封じ込み、これを色ボールに貼付した標本を作ってみたが、こんな方法もある。

以上昆虫標本を作るについて、誠におおまかな方法のアウトラインを記したが、極めて多くの仲間を持つ昆虫のことであるので、標本の作り方もまた各種多様な方法があり、技術的にもまた面倒な部分があるので、これ等を全部マスターすることは望ましいが無理もともなう。そこで標本を作る目的によって、その分野について特に精通したり、技能的な習練を重ねるのがよいと思われる。どんな標本を作るかについて一例をあげてみると、

イ) 自然分類標本

いわゆる分類のための標本で、目、科、属、種別に分類整理する

ロ) 生態標本

高山、水棲、夜行性、食性、発生期など生態環境や、習性別に標本として整理する。

ハ) 地理的分布標本

昆虫の棲む場所や、採集地別に標本とし、整理する。

ニ) 応用昆虫学的標本

益虫、害虫、寄生虫、食用虫などの別に標本として整理をする。

ホ) 解剖学的標本

昆虫の体構造、解剖の結果等を標本とし整理する。などであるが、

要は只何となく標本を作るのではなく、ある目的のために標本を作り、作り方にも上達し長く保存し、より高い目的と研究に向って進むようにすることが、標本の為にうばった虫達の霊を弔うこともなるであろう。

尚昆虫の標本を作るについて、手頃の参考書としては各種の図鑑巻末にあるが、

「新しい昆虫採集」上、京浜昆虫同好会編（S33年発行、内田老徳圃、P213）

「生物実験講座5—昆虫学、岩崎書店、（S33年発行 鶴田総一郎著P100）

などを読まれると、細部について記してあり、ためになると思う。（大町市平小学校教諭山博調査員）

オナガ

長沢 修介

近年になって当地の一部でも見受られる様になった鳥がある。それが本種である。

年と共に野鳥の棲家である原野が開拓され、鳥の数も年々少なくなって我々を心配させているのにこの鳥だけは年毎にその数が増して行く。当大町市へ初めて現われたのが昭和29年の春であった。その時は見なれぬ鳥のため双眼鏡であわてて鳥影を追い本種であることを確かめたそして秘かに当地で繁殖することを願った。その夏調査したが全々姿が見えないのであきらめていたがその年の冬になって6羽の群を発見し当地での繁殖が確実となり大喜びをした。2年目にはその巣も発見しその秋には18羽を数えた。そして昨年の冬に調査した時にはもう20羽位の集団が3つ見付かった。最初2夫婦であったものがずいぶんふえたものである。元来は関東平野のみに棲んでいたのであるが近年はあちこちに拡がり当地でも見ることが出来る様になった。

ベレー帽の様な頭部の黒色と体全体のうすい茶色が美しく名前の通り尾の長さが体長に比べて長い。ふわふわと飛び特に飛んでいる時に長い尾が目立つ。又鳴き声も大きく「ギヤーギヤー」と遠くからでもすぐそれと知れる。巣は針葉樹の高い所にかけるのが普通であるが当地のものは一般に低い場所に作る。

私の調査した所では赤松、ネズの木が多く特にネズの木

などは地上50cmくらいの所に作られていた。いずれも葉の沢山繁った所を選び良く見ないとほとんど外観では見付けにくい。大きさは大人のにぎりこぶし一つが中に入る程度のもので外側は枯枝、内側には枯葉、枯草を使用してあった。カラス科の鳥でカラス同様に人にも良く馴れるし又利巧な鳥である。2～3年前、捕えられたヒナをもらい受け飼育した事があるが、名前を呼ぶと「ゲェウィー」と返事をするし、放しておいても新聞紙を破ったりマッチ棒をくわえたり、タバコを引き抜いたりいたずらばかりして遊んでいた。又庭に出て遠くにはゆかず庭先の木に遊んでいて腹が空くとカゴに戻っていた。ただ糞を何処にでもするのは困った。（大町山岳博物館調査員）



写真…オナガの卵及び

かえったばかりのヒナ

岩石薄片の顕微鏡観察

大町附近の岩石(1)

花崗岩(みかげ石 GRANITE) 太田昌秀

松本から大町まで電車にのる機会がありましたら、今度は鉄橋を渡るたびに河原の砂や石の色に注目してみてください。島内駅のすぐ東にある女鳥羽川や梓橋の南の梓川の砂は、暗い灰色で、河原の礫にも黒っぽい石が多いようですが、穂高の北の乳川や、南大町の高瀬川の砂は真白で、礫も白い岩石が大部分です。これは、川がけずりとなってくる上流の山を作っている岩石がちがうからで、女鳥羽川の上流には安山岩などの火山岩が多く、梓川上流には、古生層という砂や泥の固ってゝきた地層があるので、河原の石は黒っぽいものが多いのですが、乳川や高瀬川では、上流から運ばれてくる岩石がほとんど花崗岩なので、白い美しい河原になります。

花崗岩は、中国地方の御影というところから美事な石材として切り出されて有名になりましたので、日本ではみかげ石と呼ばれています。高瀬川へ行って、大きなみかげ石の礫をよく見てみましょう。まず、ゴマ塩むすびのゴマのように黒い点々があります。虫めがねなどでぞいてみると、これはきらきら光る真黒な薄い板が重なったものです。これは黒雲母で、みかげ石の中によく含まれている黒い鉱物です。次に眼につくのが、少し桃色がかかった白っぽい粒で、時々1cm位の長さになったりします。これは、カリ長石という鉱物で、風化して分解すると、カオリンという白い粘土になり、セトモノを焼く原料になります。写真の中で黒くみえている(これは色が黒いから黒くみえるのではなく、この写真の方向からみた時に、この結晶が光を通さないで黒いのです。普通は透明な結晶です。)のがカリ長石で、みかげ石の中には50%位も含まれることがあります。この外に、色はありませんが、カリ長石と良く似ていて、白く不透明な鉱物が見えますが、これは斜長石です。この鉱物も分解すると白い粘土になります。写真の白い大きな結晶(pl)が斜長石で、本来は透明な鉱物ですが、この写真にもあるように、細かいゴミで汚れています(分解し始めているのです。)ので、肉眼では不透明にみえます。みかげ石を良くみると、まったく透明なもう一種の鉱物が、外の鉱物の間を埋めています。これが石英(写真のQt)です

このように、みかげ石は、黒雲母、カリ長石、斜長石、石英の4つの鉱物が集ってできている岩石です。高瀬川の白い砂をすくってみると、これらの鉱物が1つ1つばらの粒になっていて、別々に拾いあげることができるでしょう。ずっと前にも書きましたように、岩石を作る熔



(中房温泉付近の花崗岩)

けた物質(岩漿又は、マグマ)は、地表に噴き出して急に冷えると、結晶が大きく成長しないうちに固ってしまいますが地下深い所で、ゆっくりと長い時間をかけて冷却すると全体が粗い結晶質の岩石になります。今、みかげ石の顕微鏡写真をみてみますと、これは全部が粗い結晶ばかりからできています。すると、みかげ石は地下深いところで、ゆっくり冷え固った岩石だと考えなくてはなりません。

そこで、仏崎の石灰山(いしべ山)へ行ってみましょう。ここでは、石灰岩や泥の層からできている古生層の地層と、鎌ヶ峯を作っているみかげ石とがくっついていて、石灰岩や粘板岩の地層が焼かれて、いろいろな新しい鉱物が後からできています。これは、熱いみかげ石が、冷えていた古生層の地層に「ヤキ」を入れたからです。このように、みかげ石は高い熱をもって、深い地下にあることが、山での様子からも確かめることができます。

今、高瀬川の上流や、後立山連峰一帯には、広くこれと同じ花崗岩が露出していますが、これらができた時には、地下深くでゆっくり冷え固ったもので、その後この地方が隆起して高くなり、上を覆っていた岩石が、削りとられてしまったのです。白馬岳や梓川上流では花崗岩の上に、削り残されたわずかな古生層の砂や泥の地層が今でも残っています。(北海道大学理学部地鉱学教室)

山と博物館 第5巻第8号 1960年8月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 大町市上中町

信州印刷大町工場